



## 日本海海戦110周年記念式典式辞

本日ここに、武居海上幕僚長、井上横須賀地方総監、鮎田自衛艦隊司令官、トーマス米海軍第七艦隊司令官、吉田横須賀市長はじめ、多数のご来賓のご臨席を賜り、日本海海戦百十周年記念式典を挙げる出来事とは、誠に慶ばしく厚く御礼を申し上げます。

皆様ご承知のとおり、十八世紀の産業革命以来、列強は、強大な軍事力を背景に、植民地を求めて版図を広げ、その流れはアジア諸国にも及んで十九世紀になりますと列強が支配した植民地は、実に世界の約八割強であり、まさにこの弱肉強食の時代に、日本という「まことに小さな国が、明治と言う開化期を迎えた」こととなります。

ロシアは、幕末には、既に清国から沿海州を獲得し、南下の機会をうかがっており、朝鮮半島にも露骨な触手を伸ばしてきました。

このままでは、ロシアに朝鮮半島を支配され、日本も清国と同じ命運を辿る、と危機感を抱いた日本は、我が国の主権を守るため、海洋国家英国と同盟を結び、大国ロシアと戦う決断をしたのであります。まさに自存自衛の防衛戦争でありました。

軍事的にも財政的にも余裕が全くなく、苦難に耐えたぎりぎりの戦いでありましたが、国民一人一人がそれぞれの分野で死力を尽くし、大きな負担にも耐え、文字どおり挙国一致で日露戦争を戦い抜きました。

明治三十八年（一九〇五年）五月二十七日 東郷司令長官率いる日本の連合艦隊は、周到な兵力整備、情報の優越、練りに練られた巧みな作戦・用兵、そして将兵の極めて高い士気と練度で、バルチック艦隊を撃滅し、世界海戦史上例を見ない大勝利を収めたのであります。

このため、ロシアにおいても、講和止む無しの機運が高まり、ルーズベルト アメリカ大統領の仲介で、ポーツマス講和条約が締結され、日露戦争は勝利のうちに終結いたしました。

この戦争により我が国は独立を守るとともに、国際的地位を高めましたが、日本が大国ロシアに勝利したことにより、今まで抑圧されていたアジア諸国などの多くの人々に、希望と勇気を与え、独立国家建設の気運をもたらした。その後、それらの国々が独立を勝ち取ったことは、歴史の示す通りであります。

日露戦争は、まさに自衛のために戦った防衛戦争であり、「三笠」の勇姿を眺める度に、明治の人々の国を守る気概と勇気、戦略性と合理性、そして国家に対する熱い思いを感じざるを得ません。

他方、我が国固有の領土である尖閣諸島への中国の無法な侵犯に耐え、北朝鮮による同胞の拉致を許し、竹島及び北方領土を未だに解決できない現状に憂慮せざるを得ません。

戦後、わが国は、平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、安全と生存を保持しようと決意し、防衛を他国に委ね、急速な経済復興を成し遂げ経済大国になりました。

しかし、それを可能とした環境も大きく揺らぎ始め、日本は今やかつてない至難の時代を迎え、真の国民の力量が問われようとしております。

昭和三十三年（一九五八年）十一月、三笠保存会設立総会において、小泉信三先生は次のような講話をされております。

『自尊自重の精神のない国民が、他国の人々の侮りを受けるのは当然であり、自らを重んずる精神のないものは、弱小のものに対しては不遜となり、強大なものに対して卑屈になることは避けがたいことであります。他国の武力に屈するのやむなきに至った日本人は、国民としての誇りを失い、心の支えを失って、退廃に陥りました。道徳的努力を無意味なものとして嘲る思想、さらに、何者かに媚びる気持ちから、しきりに日本及び日本人を侮り嘲る風潮が生じております。』と。今から五十年以上も前の話ですが、今、我が国の現状を翻って見ますと、政治を始め、教育、マスコミなど、小泉先生が懸念された状態が未だ続いており、日本人としての誇りも矜持も持たない人が多く見受けられることは、極めて残念であります。

大東亜戦争に敗れたたとはいえ、この日露戦争・日本海海戦の勝利は、日本民族の誇りであり、世界史における金字塔であることに、何ら変わりはありません。

英国では、日本海海戦の丁度百年前のトラファルガー沖海戦の勝利を、未だ国民挙げて祝い、語り継ぎ、英国民の矜持の中核の一つを成しています。

我が国もこの日本海海戦の百十周年の記念の年に、この勝利を国民こぞって、誇りを持って祝うと共に、明治の先達が示した、国を守る気概と勇氣に学ぼうではありませんか。

昨年度、三笠の来観者は二十万人を超えました。この記念艦「三笠」が、今後とも国民に広く親しまれ、多くの方々、特に日本の将来を担う青少年にとって、その発奮の一助になることを願って止みません。

最後になりましたが、平素から大変お世話になっております地元横須賀の皆様、ご指導・ご協力を賜っております官公庁・三笠保存会会員各位、また、本日の式典に多大のご尽力を頂きました横須賀地方総監部 及び 横須賀淡交会の皆様に対して、衷心より厚く御礼を申し上げ、式辞といたします。

平成27年5月27日

三笠保存会会長

増田 信行